【第１グループ】

第５回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H26.1.23（木）

開催場所：陸前高田市庁舎４号棟第４会議室

【第１グループ】

（1）参加者

第１グループ参加者名簿

氏名	所属	備考
村上　清	Ａｉｄ　ＴＡＫＡＴＡ	
三井　俊介	特定非営利活動法人　ＳＥＴ	
紺野　文彰	通訳ガイド	
熊谷　耕太郎		
小野寺　浩樹	いちのせき市民活動センター	グループ進行
吉田　真	陸前高田まちづくり協働センター	グループ記録

（2）第５回市民会議目標

【最終的目標】「市民が望む、将来的な陸前高田のまちの姿を具体化し、整理できている」

【目　標】分野ごとの提案を磨き（ブラッシュアップ）、より具体化する

・〇〇〇をするため、〇〇〇する

・「いつ、誰がする」のかを考えることで、内容を深め、より具体化する

（3）2020 年までのビジョン（上位目標）

【 テーマ 】産業・観光

【ビジョン】「世界に誇れる陸前高田物語をつくろう！」

～古き良きものを残し、世界の最先端を進むまちへ～

〇高田が誇れる「歴史背景」、「自然環境」、「景観」を、市民が理解し、後世へ伝えてく

〇高田にしかないオンリーワンのものを、観光・産業と抱き合せて世界へ発信する

〇外からの目線を取り入れて、新しいものを吸収し、最先端の魅力あるまちへ！

（4）ビジョン実現に向けた具体的なアイディア

◎観光・産業分野を発展させるために、高田が好きな人、他の地域と比較できる人、人と人とをつなげることができる人、高田が誇れるものを発信できる人の、４つの人材をコミセン単位で育てていく（ひとづくり）

◎高田への来訪者を増やすため、地元と外、地元と地元をつなぐためのコーディネーター、まちの魅力を発信するプロモーターを育てていく（ひとづくり）

◎他地域との差別化を図るため、気仙大工の特徴をいかしたまちなみをつくる（ものづくり）

◎交流人口を増やすため、分野ごとに研修プログラムをつくる（ものづくり）

◎観光客を呼ぶために、カジノをつくる（ものづくり）

◎歴史あるまちづくりのため、景観あるまちづくりのため、気仙大工の職業訓練所をつくる

（ものづくり）
◎震災のことを市民にも来訪者に伝えるため、震災に関わる体験館をつくる（ものづくり）
◎他地域との産業の競争や差別化を図るために、来訪者や高田出身の遠方在住者から、高田の良し悪しを語れる場をつくり、6 次産業化につながるようなビジネスアイディアを創出していく
（しくみづくり）
◎産業・観光分野を発展させるため、この分野だけに限らず、市民がまちづくりに対してアイディアを出せる話せる場をつくる。
（しくみづくり）
◎他地域との差別化を図るため、まちなみの景観条例をつくる（しくみづくり）
◎障がい者や高齢者が得意分野を活かした仕事を創出するため、市民が 70～80 まで働けるようなしくみをつくっていく（しくみづくり）
◎高田の良さをまずは市民に知ってもらうために、まずは高田が誇れる歴史背景や自然環境といった地元学を、市民が学べる場をつくる。（しくみづくり）
◎より良いまちづくりのために、商工会、農協、観光物産協会などが市民に対して、将来のビジョンを見せる場を設ける（かんきょうづくり）
◎若い世代のアイディアや意志を尊重し、世代交代を早くおこない、地域を担う人材を育成するために、「出る杭は打たないルール」をつくる（かんきょうづくり）
◎若者がいきいきできる街をつくるため、娯楽施設やＢＡＲなどをつくる（かんきょうづくり）

（5）検討概要
※第 5 回市民会議の進め方について
前回の議事録を再度読み直して、まず振り返りを行った。産業・観光分野においては、「世界に誇れる陸前高田物語をつくろう」～古き良きものを残し、世界の最先端を進むまちへ！といった～上位目標の案が出ていたので、再度その目標でいいのか参加者に確認をしつつ、ひとづくり、ものづくり、かんきょうづくり、しくみづくりの具体的なアイディアを出しつつ、具体化していった。

・産業においては企業誘致、観光においては観光地誘致などが難しい
→都市からのアクセスが悪いし、他の都市との交流がないと企業誘致がしにくい
→時期によって浮き沈みがあるため、観光地の誘致も難しい
→そもそも誘致がうまくいっている市町村の成功例が少ない

・誘致が難しいのであれば、高田だけでやっていける産業・観光のアイディアを考えていこう
→そのためには、今までやってきた高田の産業（基幹産業）を伸ばす
→そのためには、地元目線ではない、外からの目線を取り入れた、まったく新しい産業を生み出す
・高田の基幹産業とは、観光、工業、農業、サービス業等
・今までの概念をくつがえすような産業体系を構築していく
・商工会、農協、観光物産協会、生産組合等が、本来のコーディネート機能の役割を果たしていない
→様々な背景があるとは思うが、コーディネート機能が果たされることで、基幹産業はもっと伸びていくと思う

・産業においては制度やしくみだけを作ってもダメだ、産業を生み出すひとをつくり、産業を発展させるひとを集めないといけない

・何かおもいきったアイディアを！観光客を呼ぶためにカジノをつくる（ものづくり）

・他の地域と差別化するために、特色あるまちなみにしたらどうか
→気仙大工の特徴をいかしたまちなみをつくる（ものづくり）
・まちなみに関しての景観条例をつくる（しくみづくり）
→公共施設を建てる際には、気仙大工の技術や高田の歴史要素を取り入れる
→本丸公園の周辺下あたりに城下町風のまちを整備する
→かぎ型道路を残す
→市内の案内掲示板も昔ながらの景観に合わせたものに統一する

・湾内を巡れるシーバスを運営していく
→広田や長部にも寄港できるように
→運営する主体は、第３セクター創設したり、外部企業を誘致したりして確保する

・地域資源でもある気仙大工の技術を残すためには、気仙大工の職業訓練所を残したらどうか（ものづくり）
→気仙大工の伝承館の施設や道具を使うことで出来るのではないか？
・気仙大工の技術者が増えれば、気仙大工による「気仙日曜大工講座」などもできるかも
・気仙大工の技術と世界最先端の技術者がコラボすることで、何かスゴイものが出来るかもしれない
→例えば、宇宙工学に関わるものなど
・ただし、スゴイものができるだけで、高田とは合わないかもしれない
→交流人口を増やす上では１つの手段としては捉えられる。

・観光・産業に関わる様々分野ごとに研修プログラムをつくる（ものづくり）
→体験ではなく研修として宿泊を含んだものとすることで地元にお金が落ちる
→ショートプログラム、ロングプログラムを混ぜ込んで、幅広い方に参加してもらう
・復興に至るまでのプロセスは国づくりとも言えるので、ＯＤＡとかを通してプログラムをおこなったりすることで、大きなプログラムとなり、ひとも集まってくる。
・他の地域でも、宿泊を絡んだ研修プログラムをおこなっているが、高田の場合は震災を経験したことから、「生きる」をテーマに研修プログラムをつくっていけば、差別化が図れる。

・市民がまちづくりに対してアイディアを出せる場をつくっていく（しくみづくり）
→最初から行政と住民が一緒に、ゼロベースからまちづくりを考える

・震災のことを後世に伝えるための体験館をつくる（ものづくり）
→３Ｄ技術などが発達することで、実際に逃げる体験などもできるかもしれない
→観光客誘致にもつながる要素もある

・商工会、農協、観光物産協会などが、市民に対して、将来のビジョンを見せる場を設ける
→場をつくることで、様々な意見やアイディアが生まれ、よりよいまちづくりへ（かんきょうづくり）

・そもそもなぜ若者はこういった会議に参加しないのか

→会議に参加しても意見が言えない、年配の方に遠慮している
・若い世代のアイディアや意志を尊重するために、出る杭は打たないツールを育てていく（しくみづくり）
→地域を担う人材を育成していくために、代替わりも早くしていく

【観光・産業分野の優先順位として】
・ひとづくりの「ひと」の捉え方によって、優先順位付けとして2パターン考えられる。
① 現状の産業・観光分野に携わっている人を、「ひと」として捉えるのか
② これから育てていくべき人を、「ひと」として捉えるのか

・①に関して言えば、人は順位づけられないので、しくみづくり→かんきょうづくり→ものづくりという優先順位になる。
・②に関して言えば、人材を育てるためには、「しくみづくり」や「かんきょうづくり」から始めなければならないので、しくみづくり→かんきょうづくり→ひとづくり→ものづくりという優先順位となる。

【ひとづくり内での優先順位】
※同列で両方とも重要
◎観光・産業分野を発展させるために、高田が好きな人、他の地域と比較できる人、人と人とをつなげる人、高田が誇れるものを発信できる人を、コミセン単位で育てていく
◎高田への来訪者を増やすため、地元と外、地元と地元をつなぐためのコーディネーター、まちの魅力を発信するプロモーターを育てていく

【ものづくり内での優先順位】
※前提としては、**高田の基幹産業**を優先しなければならない
↓
◎他地域との差別化を図るため、気仙大工の特徴をいかしたまちなみをつくる（ものづくり）
◎交流人口を増やすため、分野ごとに研修プログラムをつくる（ものづくり）
↓
◎観光客を呼ぶためにカジノをつくる（ものづくり）
◎歴史あるまちづくりのため、景観あるまちづくりのため、気仙大工の職業訓練所をつくる（ものづくり）
◎震災のことを市民にも来訪者に伝えるため、震災に関わる体験館をつくる（ものづくり）

【しくみづくり内での優先順位】
◎他地域との産業の競争や差別化を図るために、来訪者や高田出身の遠方在住者から、高田の良し悪しを語れる場をつくり、6次産業化につながるようなビジネスアイディアを創出していく（しくみづくり）

↓

◎産業・観光分野を発展させるため、この分野だけに限らず、市民がまちづくりに対してアイディアを出せる話せる場をつくる。

↓

◎他地域との差別化を図るため、まちなみの景観条例をつくる（しくみづくり）

◎障がい者や高齢者が得意分野を活かした仕事を創出するため、市民が 70～80 まで働けるようなしくみをつくっていく（しくみづくり）

◎高田の良さをまずは市民に知ってもらうために、まずは高田が誇れる歴史背景や自然環境といった地元学を、市民が学べる場をつくる。（しくみづくり）

【かんきょうづくり内での優先順位】

◎より良いまちづくりのために、商工会、農協、観光物産協会などが、市民に対して、将来のビジョンを見せる場を設ける（かんきょうづくり）

◎若い世代のアイディアや意志を尊重し、世代交代を早くして、地域を担う人材を育成するために。「出る杭は打たないルール」をつくる

↓

◎若者がいきいきできる街をつくるため、娯楽施設やＢＡＲなどをつくる（かんきょうづくり）

【第２グループ】

第５回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.12.19（木）

開催場所：陸前高田市庁舎４号棟第４会議室

【第２グループ】

（1）参加者

第２グループ参加者名簿

氏名	所属	備考
松田　邦子	陸前高田市女性団体協議会	
菅野　学	陸前高田市青年団体協議会	
永田　宗義	吉田燃料店ガス事業	
武蔵野　美和	主婦	
黄川田　美和	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
佐々木　牧恵	いちのせき市民活動センター	グループ記録

（2）第５回の目標とゴール

【目　標】「分野ごとの提案を磨き（ブラッシュアップ）、より具体化する」

・○○○をするため、○○○する

・「いつ、誰がする」のかを考えることで、内容を深める。

【ゴール】それぞれの項目（スロット）ごとに優先順位（1位～10位）をつける

（3）2020年までのビジョン

【 テーマ 】地域コミュニティ・防災

【ビジョン（案）】地域力の向上が防災意識の向上と防災教育につながり、

防災や減災の観点から伝えていく事が出来る仕組みづくりと環境づくりを進める

【ビジョン（決定）】命を守るために　～心あるコミュニティづくり　皆で考え皆で話す防災～

＜ビジョン決定に至る検討経緯＞

論点①　地域コミュニティと防災は一緒に考えるべきか、別々のビジョンにすべきか

→地域コミュニティが成り立たなければ防災は成り立たない。

しかし…

・2020年は新しいまちになっているだろう（同年代の人達の交流が生まれているだろう）。

・新しいまちのイメージが出来ない（地名も姿も変わる事を考えるとしっくりこない）

・年齢層の変化（若い世代の減少）が予測され、高齢化の進行につながるだろう

→高齢化と防災をどう組み合わせて行く事が出来るか（高齢化社会を意識した防災の仕組み）

論点②　地域コミュニティに求めるもの・あるべき姿

→地域コミュニティは必ずしも区域（地縁）で分けられたつながりではなく、心のつながりでもあり

える。地域を越えた「心あるコミュニティ」が必要
→その為には場が必要
例）レインボーハウスの様なものやカフェなど（大人向け）
　※精神的な心の支えになるものであり、気軽に集える場所
→気軽に集えるためには、きっかけが必要
※「心あるコミュニティ」も参加出来なければ意味がない。
・しきいの低さや気配りが大切である一方、しきいの低さを求めすぎると逆効果になってしまう事も
「心あるコミュニティ」とは地域コミュニティの求めるところ

論点③　仮設住宅は地域コミュニティ（心のつながり）になり得るのか
→仮設住宅に住む人は被災者であり、境遇が一緒だという事での一体感や守られている感じがある
　※仮設住宅を出て、被災者ではない人たちの中で暮らすようになると、その感覚がなくなり、辛さを感じるようになるのでは？（同じ境遇を持つ人同士の場所から出る事の怖さや辛さ）
　　⇔多かれ少なかれ人それぞれに（被災）体験している事があるはずなので、全ては共有出来なくても、少しは分かりあえるはずであり、心配するほどではないのでは？
　※被災経験には差があり、人によって感じ方も様々であることに留意

論点④　防災のビジョンとはどう考えるべきか
→防災とは、組織でも、しくみでも、個人でもあてはまる。
　※組織も、しくみも、個人もすべてがつながりすべてに通じる。
・人が集まり集う場所で今までの経験や体験を話伝えることが出来た
・言い伝えがあった事からこその教育があり、考える事が出来ていたはず。
・防災とは「みんなで考え、みんなで話をする」こと
・命を守る、命を大切にするということが防災の大前提　＝　コミュニティも一緒？

小括　2020 年までのビジョン
・地域コミュニティの求めるところは「心あるコミュニティ」
・防災とは「みんなで考え、みんなで話をする」こと
※地域コミュニティと防災とは、別々に考えがちだが、元々の考え方としてつながる所が感じられる。つながりとは何か。「命を守る」事がもととなっている。

●以上の事を踏まえ、地域コミュニティ・防災のビジョンを下記のように定め進める

「命を守るために！～心あるコミュニティづくり　皆で考え皆で話す防災～」

（4）ビジョン実現に向けた具体的なアイディア
◎コミセン力を高めるために、サポートと資金面での協力を得ながらひとづくりをすすめる
（ひとづくり）
◎観光客にもわかりやすい避難誘導のために、外部から来た人にアンケートを実施し反映させる
（ものづくり）
◎防災意識を高めるために、行政と地域が支援の力を活かして総意の形を見出していく
（しくみづくり）

◎消防団、自主防災、女性団体の活動の連携の為に、横のつながりも見直しをしていく
（しくみ）
◎まちづくりを人任せにしないために、一人一人の意識を変えていく
（ひとづくり）
◎これからのコミュニティづくりのために、出来始めたコミュニティや地域をモデルにする
（かんきょう）

（5）検討概要
まずはビジョンについて検討し、ビジョン決定後、そのビジョン達成に向けての具体的なアイディアを検討し、カテゴリー分けを行った（ビジョンについての検討内容は上記）。

【地域コミュニティ・防災】
ひとづくり（人材、組織、リーダー）
◎コミセン力を高めるために、サポートと資金面での協力を得ながらひとづくりをすすめる
・コミセン力を高めるために何が必要なのか？
→楽しく学べる場所や機会が必要
→そのきっかけづくりに「防災」があるのでは？
・「防災」をどの様にして学ぶ事が楽しいと感じる事が出来るのだろう
→サバ飯コンテストや検定などがいいのでははいだろうか（押しつけではないものの方がいい）
→たとえば何かを作り、実際につくった物を使ってみるなどの体験から生まれる物なのではないか
例）「かっこいい寝袋づくり」（子供たち向け）
　押しつけではなく緩やかな地域との関係づくりに一役かうこととなるのではないだろうか。
※得意な事を拾い上げるための、場づくりを進めることがきっかけを見つけるカギとなる
※コンテストなどを進める中で、若い人にも気軽に参加しやすいものを考える
※「防災」に関するマニュアルやリーフレットも良いが、ただ作るだけでは誰も読まない。
　制作のサポートをする組織も必要

・地域への拒否をするのには何かしらの原因があると思う
→自分の意見を言う事はなかなか出来ない。
→参加することへの気軽さが感じられない
　※役を押し付け合っている現状。役から逃げたくなくなるサポートのあり方や見守り方の重要性
→役を引き受ける＝ボランティアな部分が多い＝地域愛
　※地域愛＝その地域における楽しい思い出を必要不可欠

・「ひとづくり」とは１人１人の「学び」「成長」だと感じる
※1 人のリーダーを育てるのでは今までと同じ
※１人１人の得意なところを伸ばし、育てる事が「地域づくり」

【ものづくり】
◎観光客にもわかりやすい避難誘導のために、外部から来た人にアンケートを実施し反映させる
・観光客にも分かりやすい避難誘導のために（看板の設置をする）
→看板の設置が今まさに必要だと感じる（アンケートの前に）

→高田のマスコットゆめちゃんが逃げているマークを作って看板に採用してはどうか
その為に出来ることとして、ゆめちゃんのマークを公募しコンテストで決めてはどうか
今回ゆめちゃんの事を相談できる方がいるのも何かの縁と考えお願いしてどうか？

・観光客にも分かりやすい避難誘導のために（マップ作りのためにまち歩きをする）
※現状どこに逃げればいいのか分からない。
→逃げるための方法は常に変わり、一度作れば終わりではない、作り変えていくもの
→毎年（定期的に）更新が必要であり、作り変えていくためにはマップ作りの経験が必要
・世代ごとに実践（シュミレーション）してはどうか
・逃げるためには道を知る事が大切だと感じる（名もなき道を知る必要性）
　→「山の斜面に手すり付の階段が欲しい」などの要望も拾うことができる
・マップ作りを通してコミュニケーションが生まれるのではない
→●マップ作りをするためにそれぞれの地域でまちあるき（まちあるきツアー）をする
※同じ目標に向かって進むことで今までのしがらみを解消させることにもつながるのではないか

【かんきょう】
※ものづくりとつながる部分が多い
・みんなのための（心を閉ざしている人のために）みんなの居場所を作る
　みんな＝外に出られない人たち
※心の声を届ける事が出来る場所の必要性
※子ども達を対象にした施設は出来始めている（レインボーハウス）
※大人向けの施設がある事で、時間を気にせず１人の時間を持つ事も出来、誰かと話したい時に話が出来る環境があればいいのではないだろうか。
例）オープンカフェ
　　本が読めたり　／　勉強したり　／　話をしたり
※自分の時間が許す限り「ほっと」出来る場所（どこか開放してくれるところはないか？）
※いごこちのいい場所探しを進めて行きたい。
→どんな場所があったらいのか自由に話すワークショップを開催したい。
→◎居心地の良い場所を考える（作る）ためのワークショップを（まちづくり協働センター）が開催する
　※ワークショップは実際に喫茶店などで行ってはどうか。喫茶店もその都度違う店にする。

【第３グループ】

第５回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H26.1.23（木）

開催場所：陸前高田市庁舎４号棟第４会議室

【第３グループ】

（1）参加者

第３グループ参加者名簿

氏名	所属	備考
伊藤　昌子	おやこの広場　きらりんきっず	欠席
石川　浩行	青年会議所	欠席
太田　明成	飲食店経営	
坂井　ふき子	教員	
（氏名非公開）		
三浦　まり江	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
佐藤　大輔	いちのせき市民活動センター	グループ記録

（2）第５回の目標とゴール

【目　標】「分野毎の提案を磨き（ブラッシュアップ）、より具体化する」

・○○○をするため、○○○する。

・「いつ、誰がする」のかを考えることで、内容を深める。

【ゴール】それぞれの分野ごとに優先順位（1位～10位）がつけられている。

（3）2020年までのビジョン

【 テーマ 】教育・子育て

【ビジョン】地元の事を知る高田学教育の導入

―地元に愛着をもつひとづくり、帰ってこれる環境づくりのために

（4）ビジョン実現に向けた具体的なアイディア

◎【職場体験】体験を通じて自分のまちにどんな仕事があるのかを知る。（ひとづくり）

◎【職場体験】体験を通じて、将来の職業の選択肢に幅を持たせる。（ひとづくり）

◎【職場体験】支援や職場体験を通じて、いろいろな仕事に触れる機会を設ける。（しくみづくり・かんきょうづくり）

◎【職場体験】支援や職場体験を通じて視野を広げる。（ひとづくり）

◎地域の大人たちとの交流の場を設定する。（ひとづくり・かんきょうづくり）

◎地域の大人たちとの交流の場を活用し、体験と学びの中から緊急時に使える技を身につける。（ひとづくり）

◎【スポーツ少年団】少年団の活性化を通じて、他の学年、スポーツ団体、地域との交流の場をつくる。（ひとづくり・かんきょうづくり）

◎【スポーツ少年団】少年団を活用した交流の場の中で、コミュニケーション方法を学ぶ。（ひとづくり）
◎【スポーツ少年団】少年団を活用した交流の場の中で、社会に出る前に礼儀を学ぶ。（ひとづくり）
◎職業の選択肢を増やすために、市内全部を使ってキッザニアをする。（ものづくり）
◎【地元検定】自分たちのまちを知るために、地元検定を導入する。（ものづくり）
◎【地元検定】地元検定の成果として、認定書をつくる。（ものづくり）
◎夏季・冬季休みの平日を活用し、イベント「まちを体験する日」をつくる。（ものづくり）
◎人口の流出を防ぎ、外に出た若者に戻ってきてもらうために、足元を固めるために地元の事を知る機会を取り入れる。（しくみづくり・かんきょうづくり）
◎【地元教育】:産業・歴史・お祭りなどの伝統と地元教育、防災をカバーした副読本を作り直す。（しくみづくり）
◎【地元教育】副読本を義務教育 9 年間の学校の授業に取り入れる（地元教育カリキュラムの作成）。（しくみづくり）
◎【地元教育】地元の人材と教育を結び付け、好循環の仕組みを働かせるために、人材データベースを構築・管理する。（しくみづくり）
◎ホームスタート（家庭訪問子育て支援）を導入する。（ひとづくり・しくみづくり）
◎【七夕祭り】祭りへの参加を通して地元に愛着を持ち、地元に帰る人を育てるために、七夕祭りのまとめ役を育てる。（ひとづくり・しくみづくり）
◎【七夕祭り】まちの行事として愛着を育むために、七夕祭りに市民全員が関われる仕組みを作る。（しくみづくり）
◎【七夕祭り】七夕文化をしっかり伝えるために、実行委員会を立ち上げる。（しくみづくり）
◎【七夕祭り】若者の参加を促すために、七夕お祭りで若者の出番を作る。（しくみづくり）
◎世代間交流を促進するために、スポーツ少年団を通じた子供時代からのコミュニケーション方法の習得を図る。（かんきょうづくり）
◎地域の垣根を越えてお祭りを残す。（かんきょうづくり）

（5）検討概要
【テーマ】教育・子育て
＜ひとづくり＞
☆学校での学び＋地域での学び

- 学校での「職場体験」と受け皿
  ・子どもと地域の一体学習ができるといい（課外学習など）。
  ・学年、年齢に合わせて学びのレベルを上げる。
  （例）小学校：仕事の種類を知る／中学校：働く大変さを知る／高校：インターンシップ
  →漁業、農業、林業等の一次産業の体験も取り入れて。
- 地域での職場体験と受け皿
  ・子ども達・事業主・地域一体の受け入れの仕組み、地域で学べる環境があるといい。
  →地域の受け皿（例）中高生向けの市民講座
  ・職場体験を継続して長い期間学校のカリキュラムに取り入れるのは難しい。（1 年毎にはカリキュラムに組み入れるのは厳しい）
  ・管内では学べないものもあるので、それは修学旅行などを通じて学べるといい。

・学校で学べない事を地域で学べる環境。学校（授業）の職場体験＋地域（子供会）の職場体験でもっと詳しく学ぶなど。これを継続する。

➢スポーツコミュニティの活用

・ここは元々スポーツが盛んな地域。スポーツコミュニティを通じて社会を学べる。

・スポーツ施設の見学も職場体験になる。

＜ものづくり＞

☆知り、つながり、学ぶツール

➢構えずに学ぶ

・講座のような形ではなく、もっと構えずに体験できるものの方がいいかもしれない。

・「まちを体験する日」をつくるというのはどうか。地域の学校に出ていく感覚で。

・子ども達は学期中の土日は部活やスポーツ少年団でどうしても忙しい。

・参加出来るとしたら、夏休みや冬休み、特に平日の方がいい。

→長期休みの期間中に、夏・冬１回ずつやってみるなど。

➢地元検定

・検定をしたら、認定書もあるとうれしい。

＜しくみづくり＞

☆まちに関われるつながりをつくる

➢みんなが関われる、つながれるしくみをつくる

・お祭りで出来た繋がり、思い出は愛着に繋がり、帰ってくる理由になる。

→逆に、関わりがないと帰ってこようと思えないかもしれない。

・高田でお祭りと言えば七夕だが、高田町、気仙町どちらの七夕も自分達（地区）のものという感覚。他の地区はひとのお祭りという感覚で、見るだけで参加するものという意識は薄い。

・祭り全体の実行委員会がいない。まとめ役がまず必要ではないか。

→実行委員会の立ち上げ、そこが七夕文化を伝える。

・若い時の体験、思い出をつなげるには、お祭りで若者の出番を作りたい。

・お祭りに市民全員が関われると、「地区のお祭り」が「まちのお祭り」になる。

→例えばポスター、交通整備、何でもいい。

➢若い世代に出番をつくる

・実行委員会に高校生も参加させて、祭りに関わらせたい。

→学校にもメンバー募集を呼びかける。

→携わった思い出が地元に帰るきっかけになる。

・子ども達は、学年に合わせてやれることから参加できるようになるといい。

（例）小学生：山車を引っ張る、中学生：山車に乗る、高校生：実行委員会に参加する、ポスターを作る、山車の製作に関わる、など。

＜かんきょうづくり＞

☆世代間交流、地域間交流

➢「地域に戻る」環境

・現実的に考えると、人口流出を止める、人口を増やすというのは正直厳しいのではないか。

→むしろ、「帰って来れるようにする」ことが重要。

・地元に愛着があれば帰ってくる＝最後には帰ってくる「終のすみか」に。
・愛着を育てるには、まちにみんなが関われること、役割があるということが必要。
・お祭りでできた繋がり・思い出も愛着につながる。高田の場合はやはり七夕。
・子どもの頃からお祭りに参加する事でコミュニティに加わる、地域を知る事になる。
・地域の垣根を越えてお祭りを残したい。そのためには、若い世代の力が必要。

【第 4 グループ】

第 5 回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H26.1.23（木）

開催場所：陸前高田市庁舎 4 号棟第 4 会議室

【第 4 グループ】

（1）参加者

第 4 グループ参加者名簿

氏名	所属	備考
菅野　好子	気仙地域障がい者自立支援協議会	
熊谷　克郎	陸前高田市社会福祉協議会	
金澤　忍	えぇ町つくり隊	
酒井　菜穂子	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
鈴木　麻里子	陸前高田まちづくり協働センター	グループ記録

（2）第 4 回の目標とゴール

【目　標】分野ごとの提案を磨き(ブラッシュアップ)、より具体化する。

・○○○をするため、○○○をする。

・「いつ、誰がする」のか考えることで、内容を深める。

【ゴール】それぞれの項目（スロット）ごとに優先順位（1 位～10 位）をつける。

（3）2020 年までのビジョン（上位目標）

【 テーマ 】医療・福祉

【ビジョン】お互い様の心で、みんなで支え合うまち

(4) ビジョンに実現に向けた具体的なアイディア

【かんきょうづくり】

◎高齢者や障がい者、その家族などが自由に出入りでき気軽に思いを話せる公共のフリースペース・居場所を作る。

◎高齢者、障がい者への外出、通院をサポートする移動サービスを充実させる。

◎必要な情報にアクセスしやすい環境を作る。

・現在シルバー人材が行うサービスの医療・福祉ヘルパー型事業を強化していく。

・地域の見守り体制を構築するために、各地域にサロンのようなものを作る。

・災害公営住宅の中で世代間交流が出来る環境を作る。

【しくみづくり】

・障がい当事者が商店街や歩道など市内のバリアフリーを検証し、改善案を提出するだけでなく、行政から回答をもらって一緒に改善していくしくみを作る。

・ノーマライゼーションの要らないまちを実現するために必要なしくみ、意識等を策定するための条例を制定する。

・横のつながりを強化して効率的な情報提供を行うために、専門家を交えて団体間の情報共有のしくみを作る。

【ものづくり】

・現行制度で対応していない高齢者や障がい者へのサービスを洗い出し、必要とされる福祉サービスのビジネスモデルを作る。

・高齢者や障がい者の「今（今〇〇がしたい）」の要望を満たす何でも屋を作る。
・学校統廃合で使用しなくなる施設を、医療・福祉に関する総合センターにする。

【ひとづくり】
・市民が子供の時から障がい者、認知症などについて理解を深める。

優先順位としては、居場所作り、移動サポートの充実、情報へのアクセス環境整備の 3 点があげられる。

(5)検討概要
※第 5 回市民会議の進め方
まず、第 4 回の議論を元に事務局より提案したビジョン案を「ノーマライゼーションという言葉の要らないまちをつくろう」に改めた上で議論に進んだ。しかし、具体的なアイディアまで至らなかったため、別途場を設けた（2 月 7 日（金）18:30～20:30　於：陸前高田まちづくり協働センター）。

・ノーマライゼーションとは？
誰もが住みやすいまち。そのための条例も必要だが、制度改正などもあるため、最優先課題となるかは疑問。
→市民それぞれが「ノーマライゼーション」や「福祉」についての理解を深めた上で条例が必要になるのではないか？
→まずはお互いがお互いを理解すること。人の意識、まちの雰囲気や空気感を変えていく事から始め、浸透していくことが望ましい。
→行政側と市民側の 2 つの視点。例えば、ルールや条例については行政が主導を持ち、福祉に対する市民への理解を深めることは市民が主導を持つなど。

・情報へのアクセス
医療・福祉機関についての情報集約は必要だが、窓口の一本化にはデメリットもあるので慎重に検討すべき。
→他方、高齢者や障がい者が病院やサービス機関でその都度手続きから始めなければいけないのは負担。
→団体間での情報共有のシステムを構築するなど改善できないか。

・高齢者、障がい者サービスのニーズと現状の確認
大船渡には移動サービス(タクシーや社会福祉法人で行っている)がある。しかし、予約しないと利用できないなどすぐに対応できるものではない。
→1 人が複数の機関から異なるサービスを受けている。(家事、移動、配食など)
→高齢者の場合、緊急時には救急車が一番確実と病院からも言われるが、障がい者については難しい。障がい者についての理解が重要。
→「今」を満たすサービスが必要ではないか？
→現状を洗い出し、ニーズに対応できていない部分のビジネスモデルが作れるといい。

・外出サポート
→高齢者も障がい者も「自分でできることは自分でやりたい」という思いがある。
→買物についても「買ってきてくれる」ではなく自分で品物を選んで購入すること、外出するためにお化粧をしたり服を選んだりすることも楽しみ。
→代行サポートよりも外出サポートが求められている。

・医療面
この地域に住んでいるために受けたい医療が受けられない面もあるが、震災後に診療時間や診療科目

が増えて以前より充実している（高田病院の皮膚科は、インターネット環境を活用）。また、隣市（大船渡・気仙沼）に行けば県立・私立病院がある。
→それでも移動が難しい。
→バスだと一日がかり、また、障がい者の歯科治療（特殊）などは盛岡まで行かなければならず、送迎を家族、親戚、地域にお願いすることになる。
→小さいころから「お互いさま精神」を持つと良い。昔は「お互い様」という考え方で、地域で移動支援(同じ場所に行く場合の同乗)など行っていた。
→シルバー人材が対応している支援もあるが、移動支援の拡充が必要とされている。

・居場所づくり
地域のお茶会があっても、障がい者の方への声がけがされない。個人の得手不得手もありお茶会自体が苦痛という場合がある。
→災害公営住宅の中に集まれる場を作る。
→交流の場だけでなく、思いを伝えることのできる場所。現状では、当事者は自分の思いをどこに伝えればいいのかわからないし、意見を聞いてもらえても回答やフィードバックがない。
→高齢者や障がい者に限らず、その家族、中高生など若い世代にとっても、自由に出入りができて気軽に話せるフリースペースが必要とされている。
→例えば、土日、または年中無休で余暇を使って行ける「たまり場（居場所）」。
→公営住宅の１階に商店街入れ、その一角に「集える場」をという案もあるらしい。
→イオン（米崎町）の開業を楽しみにしている。（集える場があるかも）
→いろいろな事業所（サービスセンター等）の脇に、ある程度管理された「たまり場」がほしい。
※管理されていないと結局、何かあった時に「対応できる人がいない」状況ができる。

・地域の見守り
→現在は老人クラブの方々が主に仮説を見守り。
→元々は地域で行っていたが、今は地域がバラバラ。被災を免れた地域では、月１回の集会で確認している例もある。

・商店自体が配達支援の検討ができないか
→対応している商店もあるが、更なる認知が必要。
→生協は認知されている。

・障がい者の職場体験
→「この人を」という場合や学生の職場体験は聞くが、成人した人については聞いたことがない。
→復興に向かっていく中で、今までは「難しい」という回答だったが、今ならできるかもしれない。

・シルバー人材が行うサポートを人材センターとして拡充できないか？
→訪問型子育て支援（子育て中の家に行って支援）なども行っている。
→高齢者だけでなく、障がい者もヘルパー側として仕事ができるかもしれない。
→委託側は信頼を重視するから難しいかもしれない。
→シルバーの方が一緒について指導しながら行ったり、単独でなく 2～3 人で行える内容もあるかもしれない。

・障がい者福祉サービスのガイドブック
→現在作成しているところ。
→奥州市のものを参考にするといい。毎年作成している。（修正で済ませていない）

＊医療・福祉は広域で考えていくことが必要。
＊ビジョンは、2 月 7 日にアイディアを出した後に、再度議論し確定した。